

「スマホが学力を破壊する」(川島隆太著 集英社新書)と「スマホ脳」(アンデシュ・ハンセン著 新潮新書)は衝撃的な本であった。川島氏は仙台市の子供のべ7万人の長期調査から、スマホが学力に及ぼす悪影響を、ハンセン氏は進化生物学の見地から「ヒトの脳」と「スマホ」が、いかにミスマッチかを述べている。もう私たちは「スマホ依存症・スマホ中毒」であることを自覚しなければならないだろう。スマホなどの情報端末を作っている企業、アプリを作ったり、広告をSNSに掲載したりする企業…は、私たちが「中毒症状」にあることを前提に開発を進めている。それでも私たちの世代がICT機器とこんなに関わったのは、せいぜい20年ほど前からだが、子供たちは「生まれたときから」ICT機器があるのが当たり前の「デジタル・ネイティブ」である。それでも日本の子供たちはICT能力が国際的に下位にあるとされ、国は大急ぎで一人1台の端末を与えることになった。

生活科で「変な虫・見たことのない木の実」を見つけたら、タブレットで写真を撮ればいい。即、関連する数百のリンクが紹介される。国語の「ごんぎつね」の学習でも、ちょっと検索すれば、作者の生い立ち、作品の主題、先生向けの授業の方法すら分かってしまう。教師(大人)は「教える人」で、児童(子供)は「教わる人」という図式が成り立たなくなる日は近い。学校はどうなっていくのか？子供たちはどのような成長・発達をしていくのか？答えが出るのは10年後くらいだろうか。ICTを上手に使い、幸せな未来となるように、今、学校ができることは何か。また大きな宿題を与えられている。